2023 年 7 月 6 日放送

ストレスと漢方⑪
精神疾患領域にみられる症状に対する漢方治療

三重大学医学部附属病院　漢方医学センター　　髙村　光幸

　みなさんこんばんは。今回は、精神疾患領域とみられる症状に対する漢方治療を紹介していきましょう。

1 例目

　がん検診をきっかけに、精神不安を訴える女性の事例です。

　60 代女性。10 年前から睡眠薬を服用しています。3 年前に乳がん検診で精密検査が必要と指摘されてから、気分の落ち込みがひどくなり、3 ヶ月前からはイライラも強くなって、外出も控えるようになったということでした。昔あった嫌なことが次から次に思い出されて不安になり、誰の話も聞きたくないと思うようになっていました。精神科は受診したくなく、内科から脂質異常症、逆流性食道炎の薬とともに、睡眠薬を処方されていました。幸い乳がんの精密検査では良性の判定だったものの、強い不安を訴えます。上半身はのぼせるし、足裏もほてるといいます。寝付きが悪く夢を多くみる、便秘と下痢を繰り返す、ガスが多くゲップもでるとのことでした。脈、右は滑、左は弦脈。舌、やや背景は暗い色調で、乾燥した白苔をみます。腹力中等度で胸脇苦満、心下部圧痛と臍上悸、瘀血の圧痛も認めます。

　加味逍遙散を処方したところ、イライラを人にぶつけるのを我慢できるようになったといいます。弦脈も触れなくなりました。足裏の熱感が続くため、陰虚の傾向とみて六味丸を追加したところ、次第に諸症状軽快し、精神状態はその後すっかり安定しました。

　加味逍遙散は、女性の神経症状を伴う諸疾患に広く用いられる有名な処方です。『漢方診療医典』の「更年期障害と血の道症」という項目では、加味逍遙散の適応症例には、血の道

症特有の、とりとめのない神経症状があり、イライラして怒りやすく、灼熱感と悪寒が交互に去来し、四肢の煩熱、頭重、めまい、顔面紅潮、盗汗、不眠、全身倦怠、食欲不振などがあると記載されています。さらに血の道とは、婦人のみに起こる病態で、婦人特有の生理である月経、妊娠、分娩、産褥、更年期などの生理現象や、流産、人工妊娠中絶、避妊手術などの異常生理によって発病し、特に器質的病変と認めるべきものがなく、症状がすべて精神、神経症状であるのが特徴であると述べられています。そして、年齢的に必ずしも更年期と限らないとも書いてあります。

中医学的に加味逍遙散は、五臓の肝と脾の不和を調整する調和肝脾剤のひとつとされ、とくに肝鬱血虚による諸症状を治すという力があるとされます。肝鬱血虚とは、肝で気滞が強く起こり、肝の血が不足してしまう状態です。相対的に熱を冷ますはずの血や陰液の不足のために、気が停滞してできた熱が、まるで火のように燃え上がり、顔面紅潮やイライラ、怒りっぽさを生み出している病態です。このような病態の一部が、我が国でいう血の道症に含まれるのです。

さらに、肝腎同源という言葉があります。肝の陰液と腎の陰液は互いに関連が強いため、一方が衰えれば他方も衰えるという基礎概念を含んでいます。したがって、肝血虚や肝陰虚が進むと、腎陰虚も進行しえるのです。陰虚の特徴には、手足のほてりがあります。先の症例は、血の道症で陰虚の症状がみられたので、加味逍遙散と六味丸を併用したのです。血の道症や更年期症状には、この 2 剤の組み合わせが有効な症例が多くあります。肝腎陰虚というのがキーワードですね。

さて、現代医学では性差医療という言葉も聞かれるようになりましたが、それは 1990 年代ごろから盛んに研究されるようになったものです。しかし漢方医学では、遙か昔から、性差による治療は明らかに区別されてきました。血の道症などというのは、まさにこの性差医療に違いありません。漢方医学ではずっと常識だったことが、つい最近まで西洋医学の非常識であり、ようやく時代が追いついて、西洋医学の常識としても見直されるようになる概念のなんと多いことか。それだけ、漢方医学が全人的な医療であることの証（あかし）ではないかと思っています。

ところで、先の加味逍遙散も、比較的女性に多く用いられますが、だからといって男性に使わないものではありません。男性でも加味逍遙散の有効な方はまれではないのです。

しかし、私には残念な経験があります。この男性は加味逍遙散証だ、と自信をもって処方したのに、患者さんが薬局でもらった説明書きに、「この漢方はご婦人に使う処方です」という一文があったがために、次の受診まで服薬しなかったというものです。なんと漢方をわかっていないんだと、怒るよりもがっかりしてしまいましたが、このように処方する医師と、調剤薬局の薬剤師での、意思疎通不足や、知識の不足に由来する問題は未だに多くみられます。この例を含め、薬剤師からの説明と医師の説明に乖離があって、治療に影響を及ぼした

事例を、当時の東洋医学会地方会で発表しました。これをお聞きの薬剤師さんも、もし処方意図が不明な場合は、医師に疑義照会するなり、正しい漢方治療が行われ患者に不利益が生じないよう、工夫していただければと思います。

2 例目

さて次は、手術に伴って発症した不安神経症とみられる事例です。

40 代女性。胸部の手術を境に不安感が出るようになり、洗濯物や、水面のように、揺れるものを見るのが怖くなるといいます。そのようなものを想像して、心がざわざわするとのことでした。以前は活動的だったが、不安ですべてが億劫になり、精神科からの抗不安薬や睡眠薬を服用していました。元来不安があったところに、生命に関わる手術のイベントを経て、過度の恐怖からくる五臓の心を傷（やぶ）られたものと考えられました。腹力はやや弱く、軽度の心下痞硬と小腹不仁を認めます。

甘麦大棗湯を処方しました。心のざわざわは程度が少なくなり、全く感じない日もでてきたということでしばらく続けていただきました。精神科からの処方内服も減って、よいときと悪いときの程度が 2：1 くらいになったとして約 1 年の服用で廃薬としました。

3 例目

次は、発達障害に伴う情動不安の症例です。

20 代男性。自閉症スペクトラムの診断があり、心療内科の通院があります。薬物治療は、不眠についての処方のみ受けている方でした。気分の浮き沈みが激しく、とくにイライラが強くなって様々トラブルを起こし、自尊心や自信を失ったということでした。脳が常に緊張し、パンクしてしまいそうといいます。緊張した面持ちで話し、腹部も腹直筋が緊張していて、胸脇苦満、臍傍圧痛を触れます。意外にも脈は緊張しておらず、弱で数、つまり頻脈でした。手掌は汗でしっとりしています。舌は紅で乾燥傾向をみました。

この方には甘麦大棗湯を処方しました。継続内服によって、気分の上下は落ち着き、次第に楽に過ごせるようになりました。

甘麦大棗湯も、精神神経症状に広く用いられる処方です。『漢方診療医典』によると、本方は神経の興奮のはなはだしいものを鎮静し、急迫性のけいれんを緩解する効があると記載されています。続けて、患者は故なくして悲しみ、些細なことに泣き、はなはだしいときは混迷または狂躁の状を呈する、とまで書いてあります。いわゆるヒステリーの処方、という認識がなされてきました。ヒステリーも、その語源や解釈の問題から今は使われなくなってきた用語ですが、なぜこの処方がヒステリーに使うとされてきたかについては、是非出典である、『金匱要略』の条文を読んでみてください。